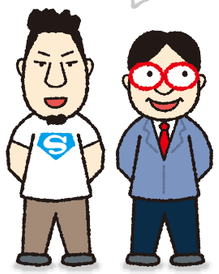
PRI·O Special discussion

みんなが誰かの役に立つ

教えて！赤メガネ先生

「21世紀のいい会社」って
どんな会社ですか？



白石封筒工業(株) 代表取締役
大阪府印刷工業組合
サステナビリティ委員長
白石 陽一
Shiraishi Youichi

イシューキュレーター
特定非営利活動法人
チュラキューブ 代表理事
大阪国際工科専門職大学
工科学部 准教授
中川 悠
Nakagawa Haruka

Vol.2 障がい者の雇用と自立支援編

時代の変化とともに、会社の役割も大きく変わりつつあります。
今求められているのは、利益だけでなく、社会全体に貢献し、持続可能な未来を築くこと。
この連載では、イシューキュレーターの中川悠氏∞の導きを受け、
サステナビリティ委員会の白石委員長Sが企業の新たな可能性について学びます。
今号では、障がい者の雇用と自立に焦点を当て、
その意義や具体的な取り組みについて深掘りします。
ぜひ未来に向けた一歩を踏み出す、その瞬間をお楽しみください。

障がい者雇用で築く、新しい時代の共生社会

S：前回に引き続き、今回も「21世紀のいい会社」について考えていきたいと思います。とくに今回は、障がい者雇用に焦点を当て、その現状や具体的な取り組みや、企業が直面する課題とその解決策について学びたいと思います。赤メガネ先生、よろしくお願いします。

∞：はい、よろしくお願いします。障がい者雇用は持続可能な社会を築くうえで、とても重要なテーマです。「21世紀のいい会社」になるためには、自然環境や製造業、さらに防災のことに加えて、さまざまな立場の人を受け入れることも求められています。だからこそ私たちは、考える枠や、受け入れの門戸を広げることが重要です。

S：受け入れることによってリスクも伴いますが、それをどう寄り添い、改善していくかが鍵になりますね。

∞：確かにリスクを伴うこともあります。たとえば、収益や効率を優先するのか、多少の非効率があっても皆が働きやすい環境を求めるのか、その選択が重要です。利益追求だけを目的とせず、皆が気持ちよく働ける会社こそ、持続可能な社会を作るうえで大切ではないでしょうか。実際、障がい者にやさしい環境は、子育て中のママや外国人にとっても働きやすい環境と言われています。しかし、会社はわかっていても変化を恐れて、なかなか実践にはいたりません。

S：僕たちの会社も、誰もが気持ちよく働ける環境づくりに取り組む必要がありますね。でも、確かに変化には時間がかかりそうです。たとえば、障がい者が働きやすい取り組みを進めている国はあるのでしょうか？

∞：デンマークなど北欧は「福祉先進国」として知られていて、健常者と障がい者がともに生活し、ともにいきいきと仕事ができる環境が整っています。一方、日本では民間企業における障がい者の法定雇用率は2.5%となっていますが、雇用しなくてもなんとかなると思っている人が少なくありません。実際、大阪においてはおよそ8,000人もの障がい者が雇用されていないのが現実です。

S：私たちが障がい者と出会ったり、雇用するにはどのようにすれば良いのでしょうか？

∞：いい質問ですね。実際、白石さんのように多くの人にとって、障がい者と交わる機会が少ないのが現状です。日本の小学校では障がい者がともに学ぶ環境が整っていますが、中学校から彼らの多くは支援学校に行くため、中・高・大学では交わることが少なくなります。そのため、障がい者と一緒に働けるのか、受け入れることができるのかと、不安になってしまうことが多い。これは学校教育の中で学んでこなかったことが要因です。だからこそ、誰一人、取り残さない社会を作るためには会社が積極的に障がい者を雇用することが重要。生産性や収益が一時的に下がっても、持続可能な未来を築くためには大切な取り組みです。ぜひ印刷組合でも取り組んでください。

S：印刷会社は紙の手内職・パッケージ、紙袋の手貼り・封入封緘作業などの軽作業が多く、古くから障がい者を雇用してきた印象がありますが、さらに働きやすい環境をつくることが大切だと実感しました。

∞：確かに、印刷会社と障がい者の相性は良いと思います。この対談を通じて、多くの会社が障がい者雇用に対する理解を深め、ともに働く社会を目指して進んでいけることを期待しています。

自立を支援し、安心して暮らせる未来へ

∞：障がい者を雇用することに加えて、自立できるよう支援することも非常に大切なテーマです。仮に彼らが60歳まで働いた場合、その頃、親御さんは80～90歳になり、自分たちが他界したあとのことを心配されるでしょう。その問題を解決するためには、たとえば障がい者の方々が買い物をし、調理をし、食後に後片付けをするなどの生活スキルの習得サポートも重要です。食事を作って食べることは生きていくうえで不可欠ですからね。

しかし、長年障がい者を雇用してきた会社でも、その一連のことを教えていないのが現状です。

そこで私は現在、大学院に通い、会社の中でいかに障がい者のQOL※を向上させる仕事をつくるか研究しています。

また、障がい者を雇用する企業と連携し、高齢者の孤立・孤食を防止しようと2018年に「杉本町みんな食堂」を開設しました。この食堂では、障がい者が高齢者のために料理をしています。障がい者の方々が調理を行い、栄養バランスの取れた食事を高齢者に提供することで、彼らの自立支援とともに、高齢者の健康維持にも寄与しています。料理の過程では、買い物から調理、後片付けまでの一連の作業を通じて、障がい者がスキルを習得し、自信を持って働ける環境を提供しています。

この取り組みは、単に食事を提供するだけでなく、障がい者と高齢者が交流する場にもなっています。親御さんたちも、自分たちが他界したあとでも、子どもたちが自立して生活できる力を身につけることができると安心されています。

S：素晴らしい取り組みですね。私は赤メガネ先生のように、これまで障がい者に接する機会があまりなかったので、彼らをどのようにサポートすれば良いのか、その想像力に欠けているのかもしれません。しかし、赤メガネ先生から多くのことを学ばせていただく機会を得ることができたので、真摯に考え、できることから実践していきたいと思っています。

∞：ぜひ一緒に取り組みましょう。今後はいろんな会社に訪問して、現場でSDGsの取り組みを学びたいですね。

S：ぜひ、よろしくお願いします。

※ QOL Quality of life（クオリティ オブ ライフ）は「人生の質」「生活の質」などと訳されることが多く、私たちが生きるうえでの満足度をあらわす指標のひとつ。

NEXT!

次回は、白石くんがSDGsを実践している会社を訪問します。
実際にどのようにしてSDGsを取り入れ、
社会全体で持続可能な取り組みを行っているのか。
その具体的なアプローチを取材します。どうぞお楽しみに！